


音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
せー27	せんがくか 旋覆花	苦・辛・鹹・微温 肺・胃・大腸	6～12g、包煎。
中医学生薬解説、参考・使用上の注意 および中医学以外の生薬解説・生薬学解説			
中医生薬解説			
	オグルマ・ホソバオグルマの頭花	消痰降気平喘 痰壅気逆および痰飲蓄結による呼吸困難、咳嗽、多痰に、桑白皮・葶藶子・桔梗・檳榔子などと用いる「旋覆花湯」。	
		降逆止噎 脾胃虚寒や痰湿内阻による噎気、嘔吐、吃逆に、代赭石・半夏・生姜・人参・炙甘草などと用いる「旋覆花代赭石湯」「旋覆半夏湯」。	
使用上の注意 旋覆花 は毛茸が多く煎じると濁って澄みにくく、咽に刺激があって痒みを生じるので、必ず布で包んで煎じる。温散降逆するので、陰虚咳嗽、風熱燥咳には禁忌である。脾虚の泥状～水様便には適さない。			
中医以外の生薬解説			
	神農本草経	味鹹温、結氣、脇下滿、驚悸を主どり、水を除き、五臓の間の寒熱を去り、中を補ひ氣を下す。 「方剤決定のコツ」の注釈 「結氣」は、邪気が結ばれること。「脇下滿」は、胸の両脇の下部が張ること。「水を除き」は、脇下の水を除き去ること。 「中を補ひ」とは、五臓の間の寒熱が「中」に相当するものと思われるが、結局は横隔膜の附近を言うのではないと思われる。心・肺は膈上にあり、肝・脾・腎は膈下にあつて、膈上膈下が相接するところであろうと思われる。横隔膜が直接に影響が及ぶ臓腑は胃にあるのではないと思われる。「氣を下げる」とは「逆上している氣を下げる」ということで、げっぷとかしゃっくりの大部分は、胃に関係があることが多い。気味から考えれば腎氣を温めながら補ひ、肺氣を助け、脾・胃の氣を益して行く働きがあると考えなければならない。	
	新古方薬囊	味鹹温、心下部の痞えを柔らげ、おくびを治す。又心下の痛みを去る。兎に角心下部堅く脹り痞へ他薬にて治し難きものに用ひて効を見る機會多し。	